少年の日の思い出 (1)

（ある日の夕暮れ、「私」は、書斎を訪れていた友人に、チョウの収集を見せました。）

【友人は一つのチョウを、ピンのついたまま、箱の中から用心ぶかく取りだし、羽の裏がわを見た。

「妙なものだ。チョウを見るくらい、幼年時代の思い出を強くそそられるものはない。ぼくは小さい少年のころ熱情的な収集家だったものだ」と彼は言った。

そしてチョウチョをまたもとの場所に刺し、箱のふたを閉じて、「もう、結構」と言った。

その思い出が不愉快ででもあるかのように、彼は口ばやにそう言った。その直後、私が箱をしまってもどって来ると、彼は微笑して、巻きたばこを私に求めた。

「悪く思わないでくれたまえ」と、それから彼は言った。「君の収集をよく見なかったけれど。ぼくも子どものとき、むろん、収集していたのだが、残念ながら、自分でその思い出をけがしてしまった。実際話すのも恥ずかしいことだが、ひとつ聞いてもらおう」

彼はランプの※ほやの上でたばこに火をつけ、緑色のかさをランプにのせた。すると、私たちの顔は、快いうすくらがりのなかに沈んだ。彼が開いた窓のふちにこしかけると、彼の姿は、外のやみからほとんど見わけがつかなかった。私は葉巻きを吸った。外では、カエルが遠くからかん高く、やみ一面に鳴いていた。友人はそのあいだに次のように語った。】

「①ぼくは、八つか九つのとき、チョウチョ集めを始めた。はじめは特別熱心でもなく、ただはやりだったので、やっていたまでだった。ところが、十歳ぐらいになった二度めの夏には、ぼくは全くこの遊戯のとりこになり、ひどく心を打ち込んでしまい、そのためほかのことはすっかりすっぽかしてしまったので、みんなは何度もぼくにそれをやめさせなければなるまい、と考えたほどだった。②チョウをとりに出かけると、学校の時間だろうが、お昼ご飯だろうが、もう塔の時計が鳴るのなんか、耳にはいらなかった。休暇になると、パンを一きれ※胴乱に入れて、朝早くから夜まで、食事になんか帰らないで、駆け歩くことがたびたびあった。

今でも美しいチョウチョを見ると、折り折りあの熱情が身にしみて感じられる。そういう場合、ぼくはしばしのあいだ、子どもだけが感じることのできる、あのなんともいえぬ、むさぼるような、うっとりした感じにおそわれる。少年のころ、はじめてキアゲハにしのびよった、あのとき味わった気持ちだ。

（高橋健二訳『ヘッセ全集2 車輪の下』新潮社 所収「少年の日の思い出」による）

※ほや…ランプなどの火を覆うガラス製の筒。 胴乱…採集したものを入れる容器。

語り手

物語や小説がある人物の視点から語られているとき、その人物を**語り手**という。『少年の日の思い出』では、前半（現在）と後半（回想）で語り手が変化している。

確認テスト 本文を読んで、問いに答えなさい。

(1) 【　】の部分の語り手は誰か。適当なものを選びなさい。

ア 友人　イ 子ども　ウ 彼　エ 私

〔　　〕

(2) ――線①「ぼく」とあるが、【　】の部分で、「ぼく」と同じ人物を指す言葉はどれか。適当なものを全て選びなさい。

ア 友人　イ 彼　ウ 私

〔　　〕

(3) ――線②「チョウをとりに出かけると……耳にはいらなかった」とあるが、これはなぜか。適当なものを選びなさい。

ア 他のことが気にならなくなるほど、チョウを採ることに夢中になっていたから。

イ みんながチョウ集めをやめさせようとするので、耳をかさないようにしていたから。

ウ 休暇なので、学校や昼食、塔の時計の音などを気にすることなくチョウ集めができたから。

〔　　〕

(4) 「ぼく」はチョウの収集の思い出についてどのように語っているか。本文の内容に合うものを選びなさい。

ア 「ぼく」は少年のころ熱情的なチョウの収集家で、今でもチョウを見ると幼年時代のことを思い出す。

イ 「ぼく」はチョウの収集に熱心だったが、みんなからその思い出をけがされるようなことを体験した。

ウ 「ぼく」にとってチョウの収集の思い出は不愉快なもので、今では当時の熱情は感じない。

〔　　〕